

本ガイドブックにおいて、デジタル技術を活用して効果的に行う食育活動を「デジタル食育」といいます。

「デジタル食育」手法の一例

●オンライン会議システムを活用した食育活動



全国どこからでも
リアルタイムで
参加者とつながる

●食育動画の作成・公開



事前に制作した
動画をホームページや
YouTubeなどで
繰り返し配信

●ホームページやブログによる食育情報の発信



不特定多数の人々に
食育情報を持続的に
発信できる

●SNSによる食育情報の発信



Instagram、
Twitter、Facebook
などで食育情報を拡散

●学校現場でのタブレットを活用した食育



動画教材等で子供の
興味をひきやすく
視覚的にわかりやすい

●アプリを活用した食育活動

アプリで健康管理や
食の教育等ができる



各章のタイトルをクリックすると
その章の最初のページにジャンプします

メリット①

「新たな日常」の中で食育を推進

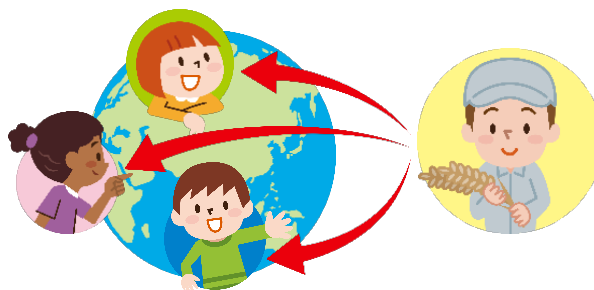
「新たな日常」において人を集めた食育活動が制限される中でも「デジタル食育」であればオンラインで食育を推進できます。



メリット②

どこからでも食育に取り組める

参加者はインターネット回線さえあればどこからでも「デジタル食育」に参加できます。講師と参加者が離れていても食育を行うことができます。



メリット③

いつでも食育活動に参加できる

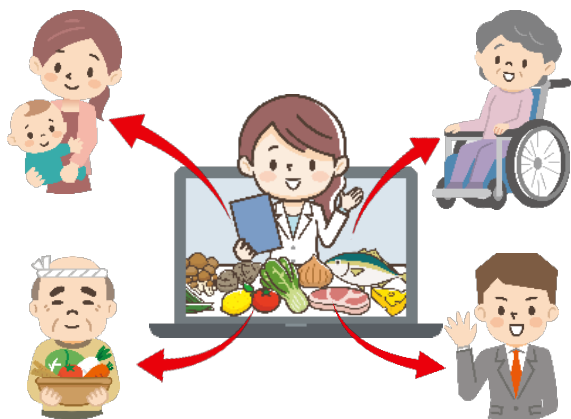
食育動画を好きな時に視聴できたり、食育アプリでちょっと空いた時間に楽しみながら学べたりと、いつでも気軽に食育に参加できます。



メリット④

今までとは違う層とつながる

「デジタル食育」はオンラインでのコミュニケーションとなるため、これまでの食育活動とは異なる新たな層へのリーチが期待できます。



メリット⑤

楽しみながら食育を推進できる

ゲーム感覚で食育の授業を受けられたり、アプリを使って日々の健康管理しながらポイントが貯まったりと楽しみながら食育を推進できます。



メリット⑥

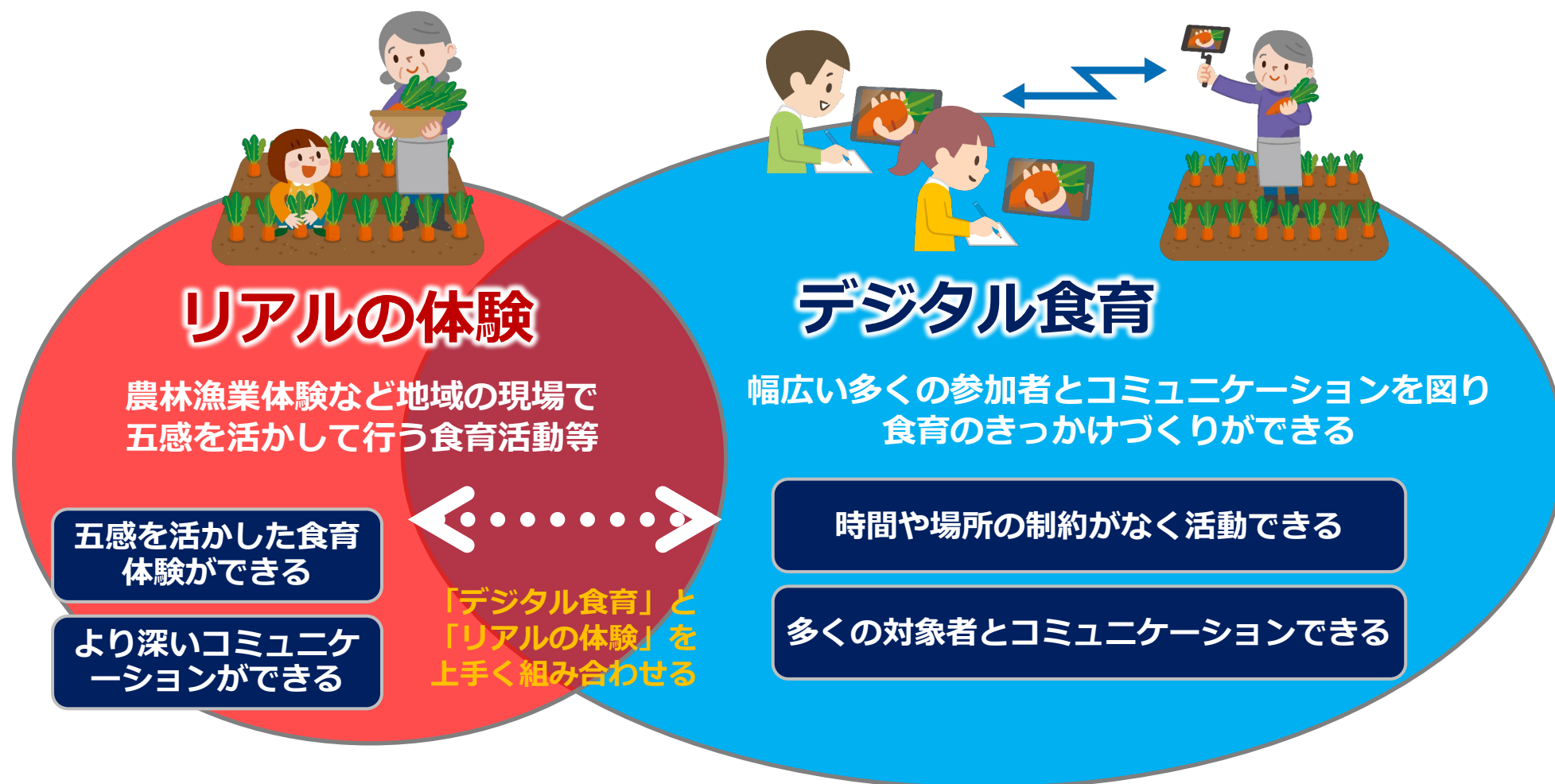
食育情報のリソースを活用できる

食育情報のデジタル化により、いつでもどこからでも食育情報を取り出せたり、食育のリソースを活用でき、食育活動の効率化を図ることができます。



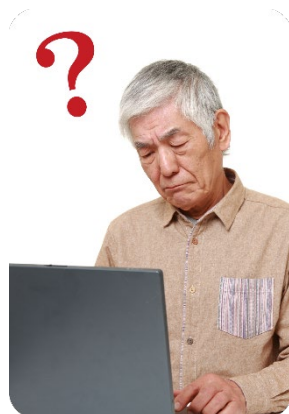
「リアルな体験」と「デジタル食育」を上手く組み合わせる

「デジタル食育」にはオンラインならではのメリットが多くありますが、「リアルな体験」には五感を活かした食育活動ができるなどのメリットがあります。これら双方の良さを補完できるよう、「リアルな体験」と「デジタル食育」とを上手く組み合わせて食育の課題を解決していきましょう。



①対象者のITリテラシー^(注)やネット環境に応じた対応が必要

- 参加者側には通信速度の安定したインターネット回線と最低限のITリテラシーが必要となります。
- 対象者がオンライン会議システムに慣れていない場合などはIT環境の事前確認が必須となります。
- オンライン初心者に向けレクチャーを行うことなどで、参加者の不安を取り除くことができます。



③参加者を飽きさせないコンテンツづくり

- 「デジタル食育」は直接対面して行わないため、緊張感が続かず飽きてしまう傾向が強まります。
- また、オンラインでは参加者とのコミュニケーションがとりづらく、参加者の反応を得にくいものです。
- 参加者にライブ感を感じられるよう視覚的にも工夫して興味を引き付けて飽きさせないようにする必要があります。



(注) ITを理解する能力、使いこなす能力

②著作権、肖像権、個人情報には注意

- 「デジタル食育」では不特定多数が閲覧するようになるため、特に著作権、肖像権等への配慮が必要です。
- 他人が制作した写真、イラスト、音楽等には著作権が存在します。
- 写真や動画を撮影する際には、他人や車のナンバープレート、特定の施設等が映り込まないように注意を払いましょう。
- 個人情報を取得した場合、流出しないようデータの管理を徹底しましょう。



④視聴者側の安全管理に配慮を

- 「デジタル食育」では、主催者と視聴者が離れていることが多く、主催者では視聴者側の安全管理を行えないことがあります。
- 主催者から視聴者に向けて注意喚起の呼びかけを行うことで、事故防止につながります。

